

『瑜伽師地論』における paripūrṇabija について

—Yogācārabhūmivyākhyā の解釈をめぐる—

岡田英作

1. はじめに

衆生は皆、菩提を獲得し涅槃に到ることができるのか。瑜伽行派の基本典籍である『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi, 以下、『瑜伽論』と略) は、この問題を種姓 (gotra) という語を用いて議論している。例えば、「本地分」の第13地『声聞地』(Śrāvakabhūmi) では、般涅槃 (parinirvāna) への到達可能性の有無を gotrastha と agotrastha との対比のなかで論じ¹、第15地『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi) では、菩薩の卓越性を述べるために、声聞・独覚・菩薩という三乗の種姓を区別し、三乗それぞれの菩提が得られるとする²。以上のように、『瑜伽論』において、般涅槃の可能性の有無や獲得される菩提の区別は、主に種姓という語を軸として語られる。一方、それらよりも後に成立した「撰決択分」(Vinīścayasamgrahaṇī) では、般涅槃や菩提の獲得に関する新たな概念として、真如所縁縁種子 (*tathatāmbana-pratyaya-bīja)³ が示される。

真如所縁縁種子に関しては、諸先学によって多岐にわたる研究がなされている。中国・日本仏教では、真如所縁縁種子という概念は、護法等造『成唯識論』の種子説に組み込まれ⁴、仏性論争のなかで種々に議論され、中国において、法宝が『一

¹ Cf. ŚrBh₁ 4.22-26, 46.6-13, ŚrBh₂ 146.6-11.

² Cf. BBh_w 3.10-4.12, 78.21-79.1, 101.27-102.3, BBh_D 2.10-26, 55.16-20, 72.1-3.

³ 便宜上、翻訳箇所以外では漢訳を使用する。

⁴ T [31] (1585) 8a20-9b7. 『成唯識論』の種子説の論旨は、吉村 [2011] 参照。山部 [1989] は、『成唯識論』における種子の本有・新薫論争として取り上げ、その歴史背景を『瑜伽論』に辿っている。この論争では「種子」(bīja) が双方にわたってキータームとして用いられ、本有説では「界」(dhātu) と「種姓」(gotra) を、新薫説では「薫習」ないし「習気」(vāsanā) が加えてキータームであるとし、特に「習気」という概念を「種子」との関連において考察する。考察を通して、『瑜伽論』古層の種子の用例の多くは「界」との親縁性が深く、『成唯識論』の本有説が教証とすると指摘する。一方、習気の意味の拡大と、種子との合一化の完成が「撰決択分」の『五識身相応地意地』所説の「遍計自性妄執習気」(*parikalpita-svabhāvābhīniveśa-vāsanā) という表現によってなされ、新薫説の挙げる教証のうち出典の確認できるものとしては最古であるとする。すなわち、『成唯識論』の本有説と新薫説とは、それぞれ伝統的種子説と、大乘的習気説との思想を伝えているというのである。また同研究のなかで、「遍計自性妄執習気」という表現がみられる一連に、出世間法の根拠として「真如所縁縁種子」という概念が現れることに言及し、種子説の大乘的再

乗仏性権実論』・『一乗仏性究竟論』で真如所縁縁種子を取り上げ、慧沼は『能頭中辺慧日論』において法宝の説を批判し、そのような論争が日本に渡り、最澄・徳一にも多大な影響を及ぼしたことがすでに指摘される。以上のように、中国・日本仏教における真如所縁縁種子をめぐる議論は、先行研究を通しておおまかな流れを捉えることができる⁵。一方、インド文献を主に扱った研究として、Schmithausen [1987: I §4, 66-84] は、真如所縁縁種子という概念の背景について、アーラヤ識の変遷という観点から説明し、この概念を『撰大乘論』(Mahāyānasamgraha) の聞熏習説の先駆形態であると見做す。また山部 [1990: 63.4-64.24] は、種子説の変遷という観点から述べ、松本 [2004:119-158] は、この語の複合語の解釈に関して詳細に論じる。しかしながら、これらの研究は、種姓との関わりが少なく、『瑜伽論』に対する註釈書である『瑜伽師地解説』(Yogācārabhūmivyākhyā, 以下、『瑜伽解説』と略) 所説の、真如所縁縁種子について言及する議論全体を検討していない。『瑜伽解説』は、玄奘訳『瑜伽師地論釈』(T [30] (1580)) との関わりが深く、『瑜伽論』に対する後代の瑜伽行派の者たちの理解を知ることのできる数少ない文献資料である。

本小論では、衆生の般涅槃や菩提の獲得に関する見解として、『瑜伽論』のなかに認められる「種姓の区別があるとする種姓の立場」と「種姓の区別を仮設とする真如所縁縁種子の立場」との2つの立場について検討したい。2つの立場は、山部 [1990: 82.18-84.24] によって後代の文献を通じて指摘される⁶。この研究をうけて、本小論は、まず『瑜伽論』の「本地分」の第2地『意地』(Manobhūmi) の教説から

解釈にともなって、成道の根拠にも再解釈が加えられたとみている。前述の研究を受けて山部 [1991] は、『成唯識論』所説の本有・新薰論争をインド仏教的文脈のなかで理解するために、『撰大乘論』(Mahāyānasamgraha) に対する註釈書である『分別秘義釈』(Vivṛtagūdhārthapiṇḍavyākhyā) にみられる本有・新薰論争を見出し、『成唯識論』の対応箇所と対照させて解説する。対照の結果として、『分別秘義釈』の内容は完全には一致しないまでも、かなりの要素を『成唯識論』と共有し、瑜伽行派での議論のありさまを伝える貴重な『成唯識論』の並行資料であると指摘する。また『分別秘義釈』に説かれる新薰説も、「撰決択分」の『五識身相応地意地』所説の真如所縁縁種子をめぐる一段を受けているという。

⁵ 筆者が管見した限りの中国・日本仏教を中心とした真如所縁縁種子に関する研究を挙げれば以下のとおりである。インド・中国・日本の文献における真如所縁縁種子に関する箇所を概略したものに常盤 [1973: 261-263, 479-546] がある。その他の研究としては、久下 [1972] [1975] [1985: 451-485] [1988]、西 [1987]、富貴原 [1988: 244-246, 341-343, 353-355, 374-375, 428-429]、襄輪 [1991]、田村 [1992: 398-401]、末木 [1995: 425-436, 458-459, 471-472, 787-804]、松本 [2004: 126-150]、吉村 [2006] [2009] [2011] [2012: 275-278] がある。

⁶ 山部 [1990: 82.18-84.24] は、『分別秘義釈』において『撰大乘論』所説の聞熏習種子を解釈する3説のうち、真如所縁縁種子に関連する第1説と第2説とを取り上げ、「後期瑜伽行派には解脱論に関して伝統的種姓説を重視する立場と、「真如所縁縁種子」的なアプローチを重視する立場とがあったのであろう」と指摘する。

種姓の立場を、「撰決択分」の『五識身相応地意地』の教説から真如所縁縁種子の立場を直接確認する。さらには、先に挙げた『意地』の教説に対して解説し、真如所縁縁種子についての言及のある『瑜伽解説』の議論 (paripūrṇabīja をめぐる議論) を概観して、後代の瑜伽行派の者たちの間に 2 つの立場が確かに見い出され、これらの立場がどのように分かれているのかを指摘したい。

2. 『瑜伽師地論』における立場

般涅槃や菩提の獲得に関する見解として、『瑜伽論』における種姓の立場と真如所縁縁種子の立場とを検討するために、「本地分」の『意地』の教説および「撰決択分」の『五識身相応地意地』の教説を概観しよう。

2.1. 種姓の立場

まず種姓の立場として、「本地分」の『意地』の教説を取り上げる。この教説は種子に関する教説のうち、般涅槃の可能性の有無について論じる箇所であり、後述する「撰決択分」の教説と関連し、『瑜伽解説』も解説を加える。

MBh (Skt.) YBh 25.1, (Tib.) D 12b5, P 14a2, (Ch.) T 284a29:

tat punaḥ sarva-bījakaṃ vijñānaṃ parinirvāṇa-dharmakāṇaṃ paripūrṇa-bījam
aparinirvāṇa-dharmakāṇaṃ punas tri-vidha-bodhi-bīja-vikalam //

[和訳] また、そのすべてのものの種子を有する識 (一切種子識)⁷ は、般涅槃し得る性質をもつ者たちにとっては、種子が完全に備わっており、一方、般涅槃できない性質をもつ者たちにとっては、3種の菩提種子が欠けているのである。

『意地』の教説では、一切種子識に関して、般涅槃し得る性質をもつ者は種子が完全に備わっており、般涅槃できない性質の者は3種の菩提種子が欠けていると述べ、般涅槃の可能性が菩提種子の有無の点から示される。すなわち、一切種子識の種子が完全に備わっている場合には、般涅槃し得る性質として菩提種子が含まれる。

⁷ 便宜上、翻訳箇所以外では漢訳を使用する。

『瑜伽論』において、種子 (bīja) という語は種姓の同義語に数えられ⁸、前述のように『声聞地』や『菩薩地』では種姓の区別の点から、般涅槃や菩提の獲得の問題を論じる。同様にこの教説も、菩提種子の有無から般涅槃の問題を扱い、菩提種子を3種類に分けるので、種姓の区別を説く種姓の立場と言えよう。これは「本地分」以来の『瑜伽論』の基本的な立場である。

2.2. 真如所縁縁種子の立場

次に真如所縁縁種子の立場として、「撰決択分」の『五識身相応地意地』に説示される真如所縁縁種子の教説を取り上げる。この箇所は種子に関する教説の一部であり、前掲の『意地』の教説を受けていると考えられる。この教説を直接扱った研究は以下のとおりである。Schmithausen [1987: II 364.10-30, 368.9-369.18] は、当該教説の前半部を英訳し、解説を加える。Sakuma [1990: II 161-165] は、チベット訳のテキストを校訂し、独訳する。山部 [1990] は、当該教説の還梵とその和訳を行い、真如所縁縁種子の意味を解説する。松本 [2004: 119-158] は、チベット訳・漢訳 (真諦訳・玄奘訳)・山部 [1990] による還梵および先行する諸研究の翻訳の対照とその検討がなされ、真如所縁縁種子の複合語の解釈について詳細に考察する。本小論では、諸先学の成果を踏まえつつ、便宜上、デルゲ版 (D) を底本として北京版 (P) と校合したチベット訳のテキストを提示し、真如所縁縁種子の教説をみていきたい。なおテキストの和訳に際して、山部 [1990] による還梵と和訳および松本 [2004] による和訳を適宜参照した。

ViS (Tib.) D zhi 27b3-5, P zi 30a7-b1, (Ch.) 玄奘訳 T 589a13-17, 真諦訳 T 1025c13-16, 山部 [1990] (*Skt.) 71.12-15⁹, (Tr.) 71.16-21, 松本 [2004] (Tr.) 121.5-9¹⁰:

gal te bag chags des sa bon thams cad bsdus la¹⁾ / de yang (P30a8) kun tu²⁾ 'gro ba'i gnas ngan len zhes³⁾ bya bar gyur na / de ltar (D27b4) na 'jig rten las 'das pa'i chos mams skye ba'i sa bon gang yin / de dag skye ba'i sa bon gyi dngos po gnas ngan

⁸ Cf. ŚrBh₁ 2.21-22, BBh_w 3.6-8, BBh_D 2.7-8. また『声聞地』(ŚrBh₁ 30.5-10) では、種姓の解説に出世間法の種子 (lokōttara-dharma-bīja) という語が用いられる。

⁹ Cf. 山部 [1990: 71.12-15]: yadi tayā vāsanayā sarvāṇi bījāni samgrhīṭāni sā ca sarva-traga-dauṣṭhulya ucyata evaṃ lokōttara-dharmāḥ kim-bījā utpadyante, na hi te dauṣṭhulya-svabhāva-bījā iti yujyata ity āha / lokōttara-dharmās tathatālabhāna-pratyaya-bījā utpadyante na tūpacita-vāsanā-bījāḥ /

¹⁰ Schmithausen [1987] (Tr.) II 364.16-18, 368.11-20, Sakuma [1990] (Tib.) II 161.15-21, (Tr.) II 163.18-164.5.

len gyi rang bzhin can yin par ni mi rung ngo zhe na /
smras pa / (P30b1) 'jig rten las 'das pa'i chos rnam ni de bzhin nyid la dmigs pa'i
rkyen gyi sa bon dang ldan par skye'i⁴⁾ (D27b5) bag chags bsags pa'i sa bon dang
ldan pa ni ma yin no //

¹⁾ pa D, ²⁾ du D, ³⁾ ces P, ⁴⁾ skye ba'i D.

[和訳] もし、その習気¹¹⁾によって、すべてのものの種子 (一切種子) が包摂され、それはまた、遍在する麤重と言われることになるならば、そうであるならば、出世間の諸法は何を種子として生じるのか¹²⁾。それら〔出世間の諸法〕が生じる種子であるもの (*bīja-bhāva) が麤重を本質とするものであるのは不合理である¹³⁾。

答える。出世間の諸法は、真如を所縁縁とするものを種子として (*tathatā lambana-pratyaya-bīja)¹⁴⁾ 生じるけれども、積集された習気を種子として (*upacita-vāsanā-bīja) [生じるの] ではない。

先に指摘したように『意地』では、一切種子識に般涅槃し得る性質として菩提種子が含まれる。しかし「撰決択分」に至って、一切種子が習気によって包摂され、遍在する麤重であると言われるのを起点として¹⁵⁾、一切種子識に菩提種子があるのは不合理となるために、出世間法が生じる種子が何であるか再検討する必要に迫られた¹⁶⁾。このような問題に対して、出世間法が生じる種子は、積集された習気という種子ではなく、真如所縁縁種子であると答える。この解答を踏まえて、続けて以下のような問答がなされる。

ViS (Tib.) D zhi 27b5-28a2, P zi 30b1-6, (Ch.) 玄奘訳 T 589a17-28, 真谛訳 T 1025c16-23, 山部 [1990] (*Skt.) 73.22-74.1¹⁷⁾, (Tr.) 74.2-15, 松本 [2004] (Tr.)

¹¹⁾ この習気とは、当該問答の直前に規定されるアーラヤ識に存するすべての法の構想された本質に執着する習気 (遍計自性妄執習気, *parikalpita-svabhāvābhiniveśa-vāsanā) を指す。山部 [1990: 67.2-12] 参照。

¹²⁾ 山部 [1990] の還梵の構文に従って和訳した。

¹³⁾ チベット訳に従って和訳した。

¹⁴⁾ tathatā lambanapratyayabīja という語の文法的解釈は、松本 [2004: 122.9-123.3] に従って和訳した。

¹⁵⁾ 種子の思想に習気という概念が融合する過程に関しては、山部 [1989] [1990: 64.3-14] 参照。

¹⁶⁾ 山部 [1990: 64.15-24] も同様の見解を示す。

¹⁷⁾ Cf. 山部 [1990: 73.22-74.1]: yadi nōpacita-vāsanā-bījā utpadyanta evaṃ kasmāt parinirvāṇa-dharmaka-gotra-trayāḥ pudgalā vyavasthāpitāś cāprinirvāṇa-dharmaka-gotrāḥ pudgalāḥ, tathā hi sarveṣāṃ api tathatā lambana-pratyayo 'stīty āha / āvaraṇānāvaraṇa-viśeṣāt / yeṣāṃ tathatā lambana-pratyaya-prativedha āyantikam āvaraṇa-bījam asti te 'parinirvāṇa-dharmaka-gotrā vyavasthāpitāḥ / ye 'nye te

121.5-9¹⁸:

gal te bag chags bsags pa'i sa bon dang ldan par skye ba ma (P30b2) yin na / de lta na ni ci'i phyir gang zag yongs su mya ngan las 'das pa'i chos can gyi rigs gsum rnam par gzhas¹⁾ pa dang / gang zag yongs su mya (D27b6) ngan las mi 'da' ba'i chos can gyi rigs rnam par gzhas pa mdzad de / 'di ltar (P30b3) thams cad la yang de bzhin nyid la dmigs pa'i rkyen yod pa'i phyir ro zhe na /²⁾

smras pa / sgrub pa dang / sgrub pa med pa'i bye brag gi phyir te / gang dag la de bzhin nyid la dmigs pa'i rkyen rtogs par (D27b7) bya ba la gtan du³⁾ sgrub (P30b4) pa'i sa bon yod pa de dag ni yongs su mya ngan las mi 'da' ba'i chos can gyi rigs dang ldan par rnam par gzhas⁴⁾ la / gang dag de lta⁵⁾ ma yin pa de dag ni yongs su mya ngan las 'da' ba'i chos can gyi rigs dang ldan par rnam par (P30b5) gzhas go // gang dag (D28a1) la⁶⁾ shes bya'i sgrub pa'i sa bon gtan du⁷⁾ ba lus la zhen pa yod la / nyon mongs pa'i sgrub pa'i sa bon ni med pa de dag las kha cig ni nyan thos kyi rigs can yin la / kha cig ni rang sangs rgyas kyi rigs can yin (P30b6) par rnam par gzhas go // gang dag⁸⁾ (D28a2) de lta ma yin pa de dag ni de bzhin gshegs pa'i rigs can yin par rnam par gzhas ste / de'i phyir nyes pa med do //

¹⁾ *bzhag* P, ²⁾ om. / D, ³⁾ *tu* P, ⁴⁾ *bzhag* P, ⁵⁾ om. *lta* P, ⁶⁾ add. *de* D, ⁷⁾ *tu* P, ⁸⁾ add. *la* D.

[和訳] もし、[出世間の諸法が、] 積集された習気を種子として生じるのではないならば、そうであるならば、なぜ般涅槃し得る性質をもつ3つの種姓をもつ (*parinirvāṇa-dharmaka-gotra-traya) 者が設定され、般涅槃できない性質をもつ種姓をもつ (*aparinirvāṇa-dharmaka-gotra) 者が設定されるのか¹⁹。というのも、真如という所縁縁 (*tathatālabhāna-pratyaya) はすべての者にあるからである。

答える。障害 [があること] と障害がないこととを区別するからである。[すなわち、] 真如という所縁縁に通達すること (*tathatālabhāna-pratyaya-prativedha) に対して、永遠に障害の種子がある彼らは、般涅槃できない性質をもつ種姓を備えた者に設定され、そうではない彼らは、般涅槃し得る性質をもつ種姓を備えた者に設定される。永続的な所知障の種子が拠り所

parinirvāṇa-dharmaka-gotrā vyavasthāpitāḥ / yeṣāṃ jñeyāvaraṇa-bījam ātyantikam āśraya-sanniviṣṭam na tu kleśāvaraṇa-bījam teṣāṃ ke-cic chrāvaka-gotrā vyavasthāpitāḥ ke-cic ca pratyekabuddha-gotrāḥ / ye 'nye te tathāgata-gotrā vyavasthāpitāḥ / tasmād adosaḥ /

¹⁸ Sakuma [1990] (Tib.) II 161.22-162.11, (Tr.) II 164.6-165.7.

¹⁹ 山部 [1990] の還梵の構文に従って和訳した。

に入り込んでいて、煩惱障の種子がない彼らのうち、ある者は声聞種姓をもつ者であり、ある者は独覚種姓をもつ者であると設定される。そうではない彼らは、如来種姓をもつ者であると設定される。それ故、過失はない。

この問答では、出世間法が真如所縁縁種子から生じるならば、真如という所縁縁はすべての者にあるので、種姓の区別が成立しなくなると反論し、種姓の区別を設定する理由を問う。これに対して、障害の有無を区別するからと答えて、障害の種子の有無の点から種姓の区別が設定される。すなわち、障害の種子によって種姓の区別が会通され、仮設とされる²⁰。

以上のように、真如所縁縁種子の教説では、出世間法が一切種子識に含まれる菩提種子や種姓から生じるのではなく、真如所縁縁種子から生じ、般涅槃の可能性の有無や菩提の区別は、障害の種子の有無に拠るものであり、従来の種姓の区別は仮設とされる。これが「撰決択分」に新しくみられる真如所縁縁種子の立場である。

3. 『瑜伽師地解説』の paripūrṇabija をめぐる議論

以上、『瑜伽論』の教説を通して、般涅槃や菩提の獲得に関する見解として、種姓の立場と真如所縁縁種子の立場との2つの立場が認められることを確認した。次に『瑜伽解説』の paripūrṇabija をめぐる議論を概観して、後代の瑜伽行派の者たちの間にこの2つの立場が確かに見い出され、これらの立場がどのように分かれているのかを指摘したい。以下、デルゲ版を底本として北京版と校合したチベット訳のテキスト²¹とその和訳を提示しながら、この議論を概観しよう²²。

3.1. 般涅槃や菩提の獲得に関する2つの立場

²⁰ 『菩薩地』「種姓品」(Gotra-pāṭala, BBh_w 3.13-18, BBh_D 2.12-15) では、菩薩種姓をもつ菩薩は煩惱障と所知障を浄化し、声聞種姓をもつ声聞や独覚種姓をもつ独覚は煩惱障の浄化だけで、所知障は浄化され得ないと説かれ、種姓の区別の点から、二障の浄化の区別を述べる。

²¹ チョネ版およびナルタン版の異読を確認するために『中華大蔵経』(Zh)を参照したが、読みに影響を及ぼす異読は当該箇所に関してないようである。チベット訳のテキストは、デルゲ版と北京版との校合を示し、『中華大蔵経』のページ数を入れた。

²² 『瑜伽解説』の paripūrṇabija をめぐる議論は、本小論の註6で取り上げた山部氏の推測を保証するものとして、山部 [1990: 84.25-85.12] でその一部が扱われる。

paripūrṇabīja をめぐる議論

[YBhVy (Tib.) D 92b3-93b5, P 112b4-114a2, Zh 251.1-253.15]

1. 般涅槃や菩提の獲得に関する 2 つの立場

(Zh251) **sa bon** (D92b4, P112b5) **yongs su tshang ba yin no**¹⁾ zhes bya ba ni

(1) kha cig na re zag pa dang bcas pa dang zag pa med pa'i chos rnam kyī nus pa yod pa la bya'o²⁾ zhes zer ro //

(2) kha cig na re kun gzhi rnam par shes pa la ni 'jig rten las (P112b6) 'das pa'i chos kyī sa bon med de / 'di ltar 'jig rten las 'das pa'i chos (D92b5) rnam ni de bzhin nyid la dmigs pa'i rkyen gyī sa bon las byung ba yin gyī / de'i bag chags bsags pa'i sa bon³⁾ las byung ba ma yin no⁴⁾ (P112b7) zhes bstan bcos las 'byung ngo⁵⁾ zhes zer ro //

¹⁾ add. // P, ²⁾ add. // P, ³⁾ om. bon P, ⁴⁾ add. // P, ⁵⁾ add. // P.

[和訳] [『意地』の中で] 種子が完全に備わっていること (**paripūrṇa-bījam**) とされるのは、

(1) 或る者は、有漏と無漏との諸法の潜勢力 (*śakti) があるという意味においてである、と言う。

(2) 或る者は、アーラヤ識には出世間法の種子がない。すなわち、「出世間の諸法は、真如を所縁縁とするものを種子として (*tathatālabana-pratyaya-bīja) 生じるものであるけれども、その積集された習気を種子として (*upacita-vāsanā-bīja) 生じるものではない²³⁾」と論書(「撰決択分」)の中にある、と言う。

『瑜伽解説』は、『意地』所説(本小論 2.1.)の種子が完全に備わっていること (**paripūrṇa-bīja**) という語をめぐって、有漏・無漏の諸法の潜勢力があるとする第 1 の立場と、出世間法の種子を含まないとする第 2 の立場とを挙げる。第 1 の立場が述べる無漏法の潜勢力とは、『意地』の教説を受けての解答であることから、菩提種子を指すと考えられる。したがって、『意地』の教説の趣旨と合致するのは、種子が完全に備わっていることに関して無漏法の潜勢力を認める第 1 の立場である。第 2 の立場は「撰決択分」の真如所縁縁種子の教説(本小論 2.2.)を引用して、積集された習気という種子であるアーラヤ識(一切種子識)から出世間法は生じない

²³⁾ ViS (Tib.) D zhi 27b4-5, P zi 30b1, (Ch.) 玄奘訳 T 589a16-17, 真谛訳 T 1025c15-16: 'jig rten las 'das pa'i chos rnam ni de bzhin nyid la dmigs pa'i rkyen gyī sa bon dang ldan par skyē'i bag chags bsags pa'i sa bon dang ldan pa ni ma yin no //

ので、出世間法は真如所縁縁種子から生じると主張する。

1.1. 第 1 の立場

de la phyogs snga ma smra ba dag gis lan btab pa / bstan bcos kyi don ni 'di yin te /

(a) de bzhin nyid (D92b6) la dmigs pa'i rkyen rnams kyis¹⁾ sa bon brtas²⁾ par bya ba ni (P112b8) de dag gi rgyu yin gyi gnas ngan len gyi bag chags bsags pa ni ma yin te / 'di ltar de ni gnas ngan len gyi skabs yin pa'i phyir ro //

(b) nmam par shes pa la zag pa³⁾ med pa'i sa bon med na ni dang po nyid nas 'di ni (P113a1) nyan thos (D92b7) dang rang sangs rgyas dang de bzhin gshegs pa'i rigs can dang / de dag gi rigs med pa'o⁴⁾ zhes nmam par gzhag pa kho na yang mi rigs par 'gyur bas / de'i phyir zag pa med (P113a2) pa'i chos rnams 'byung ba'i rgyus sa bon gyi nmam grangs kyi rigs yod do //

(c) 'bras bu'i (D93a1) bye brag byang chub rnam gsum yang med par 'gyur te / dmigs pa tha dad pa ma yin pa'i phyir ro // de bzhin nyid la 'dod (P113a3) pa bzhin byed pa ci zhig yod⁵⁾ na 'di ltar gcig la ni nyon mongs pa spang ba'i phyir nye bar gnas la / gcig ni shes bya'i sgrib pa spang (D93a2) ba'i phyir nye bar gnas par 'gyur te / de'i phyir rgyud la gnas pa'i rgyu yod (P113a4) par 'dod par bya'o //

¹⁾ *kyi* D, ²⁾ *rtas* P, ³⁾ *om. pa* P, ⁴⁾ *add. // P*, ⁵⁾ *yong* Zh.

[和訳] その [2 つの立場の] 中で、先の立場の論者たちが [第 2 の立場の論者に] 答える。論書 (「撰決択分」) の意味は以下である。

(a) 真如を所縁縁とする諸々のもの (智、道)²⁴ によって増大される種子

²⁴ 真如が複数形となるのは考え難い。山部 [1990: 85.5-8] も同様に指摘し、「真如を所縁縁 (とする智?) によって育成された (法爾) 種子」と理解する。本小論でも真如を所縁縁とする智や道と理解したい。というのも、「撰決択分」の『五識身相応地意地』に真如を所縁とする道/ 智 (*tathatāmbana-mārga/ -jñāna) や「撰決択分」の『有余依無余依地』に真如を所縁とする道の修習 (*tathatāmbana-mārga-bhāvanā) という表現がみられるからである。第 1 の立場は、このような表現を典拠に tathatāmbanapratyayabīja という語を会通したと考えられる。また、『瑜伽解説』の paripūrṇabīja をめぐる議論のなかで、第 3 の立場が立てる [理証 (2)] でも真如を所縁とするもの (tathatāmbana) が道 (mārga) であるとされる。以下、「撰決択分」の教説を挙げる。

ViS (Tib.) D zhi 8a3, P zi 9b2, (Ch.) 玄奘訳 T 581c5-6, 真諦訳 T 1020b9-10, 袴谷 [1979] (Tib.) 41.3-4, (Tr.) 65.26-66.3, Schmithausen [1987] (Tib.) I 199.18-20, 松本 [2004] (Tr.) 143.17-18:

de bzhin nyid la dmigs pa'i shes pas kun tu bsten¹⁾ cing goms par byas pa'i rgyus gnas 'gyur bar byed do //

¹⁾ *em. brten* DP, Cf. Schmithausen [1987: II 485.1-2].

[和訳] 真如を所縁とする智 (*tathatāmbana-jñāna) を通して、専心し修習することの故に、拠り所を転じるのである。

ViS (Tib.) D zhi 8a4-5, P zi 9b4-5, (Ch.) 玄奘訳 T 581c9-11, 真諦訳 T 1020b12-14, 袴谷 [1979]

は、それら〔無漏の諸法〕の原因であるけれども、積集された麤重の習気は〔そうでは〕ない。すなわち、そ〔の積集された麤重の習気〕は麤重の根拠 (**adhikāra*) であるから。

(b) [アーラヤ] 識に無漏種子 (*anāsrava-bīja*) がなければ、実にはじめから、これが声聞や独覚や如来の種姓をもつ者や、それらの種姓がない者であるという設定すらも、道理に合わないので、それ故、無漏の諸法が生じるという理由で、種子の同義語である種姓がある。

(c) 結果の区別である三種菩提もまたなくなってしまう。というのも、所縁が異ならないから。真如を認めて一体どうしようというのか。すなわち、一方では、煩惱〔障〕を捨てることに基づいて〔声聞・独覚菩提を〕現前し (**upa-√sthā*)、他方では、所知障を捨てることに基づいて〔無上正等菩提を〕現前する。それ故、相続に存する (**saṃtāna-vartin*) 原因 (無漏種子) があると認めるべきである。

第1の立場は、『意地』の教説を支持し、『瑜伽論』には明示されない無漏種子 (*anāsrava-bīja*) という概念を援用して3つの点 (a-c) から第2の立場の主張を退ける。(a) では、第2の立場が掲げた「摂決択分」の文言を会通し、*tathatālabhana-pratyayabīja* という語を「真如を所縁縁とする諸々のもの (智、道) によって増大される種子」と解釈する²⁵。真如を所縁縁とする諸々の智あるいは道によって無漏種子を増大することで無漏法が生じるのである。しかしながら、無漏法が生じないも

(Tib.) 41.15-17, (Tr.) 66.7-12, 松本 [2004] (Tr.) 143.11-13:

kun gzhi mnam par shes pa ni mi rtag pa dang / len pa dang bcas pa yin la / gnas gyur pa ni rtag pa dang len pa med pa yin te / _(D8a5) de bzhin _(P9b5) nyid la dmigs pa'i lam gyis bsgyur ba'i phyir ro //

[和訳] アーラヤ識は無常であり、有取である。〔一方、〕転依 (*āsraya-parivṛtti*) は常住であり、無取である。というのも、真如を所縁とする道 (**tathatālabhana-mārga*) を通して〔拠り所が〕転じるからである。

ViS (Tib.) D zi 123b3, P'i 138b8-139a, (Ch.) T 748b6-7, Schmithausen [1969] (Tib.) 50.4-6, (Tr.) 51.5-8, 松本 [2004] (Tr.) 142.8-9:

dgra bcom pa'i gnas gyur pa ni skye mched drug gi rgyu las byung ba ma yin gyi¹⁾ / de bzhin nyid la _(P139a) dmigs pa'i lam bsgoms pa'i rgyu las byung ba yin te /

¹⁾ *te D.*

[和訳] 阿羅漢の転依 (*āsraya-parivṛtti*) は、六処を原因として起こるのではないけれども、真如を所縁とする道の修習 (**tathatālabhana-mārga-bhāvanā*) を原因として起こるのである。

²⁵ インドにおいて、真如所縁縁種子という語に対して複数の解釈が存在したことが、玄奘の弟子の言葉として、基の『瑜伽師地論略纂』(T [43] (1829) 184b28-185a8)、遁倫の『瑜伽論記』(T [42] (1828) 614c5-615a8)などに伝えられる。常盤 [1973: 496-513]、西 [1987]、襄輪 [1991]、吉村 [2006] [2011] 参照。

のに関して、「撰決択分」所説の積集された習気という種子 (*upacita-vāsanā-bīja) という語を「積集された麁重の習気」と読み替え、麁重の根拠を習気とする。この立場は種子と習気とを区別して、一切種子から積集された習気という種子を除外する意図がみられる。(b) では、アーラヤ識に無漏種子がなければ、種姓の設定が道理に適わないということから、無漏種子の存在を主張する。(c) では、所縁がただ真如のみであると三種菩提の区別がなくなってしまうと指摘し、真如を認めることに意味はなく、煩惱障を捨てて声聞菩提や独覚菩提を現前し、また所知障を捨てて無上正等菩提を現前することから、相続に存する先天的な原因、つまり無漏種子があると主張する。

1.2. 第 2 の立場

phyogs gnyis pa smra ba dag gis smras pa / bstan bcos ni gzhan du drang bar mi nus te /

(a) gal te gnas ngan len gyi bag chags (Zh252) des sa bon thams cad bsdus pa yin na 'jig rten (P113a5) las (D93a3) 'das pa'i chos rnam 'byung bar 'gyur ba'i sa bon gang yin te / de dag gi rgyu gnas ngan len gyi sa bon yin par mi rigs so¹⁾ zhes rab tu bsgribs²⁾ te bstan to zhes zer ro //

(b) rigs nam par (P113a6) gzhas pa yang de nyid las bstan te / gang dag gi rgyud la de bzhin nyid³⁾ dmigs pa rtogs⁴⁾ par mi (D93a4) 'gyur ba gtan du ba'i sgrib pa'i sa bon yod pa de dag ni yongs su mya ngan las mi 'da' ba'i rigs rgyud la nyon (P113a7) mongs pa'i sgrib pa'i sa bon ni med la / gtan du ba'i shes bya'i sgrib pa'i sa bon yod pa de dag ni kha cig nyan thos kyi rigs can yin pa dang / kha cig rang sangs rgyas kyi (D93a5) rigs can yin par rnam par (P113a8) gzhas⁵⁾ go // gang dag la de gnyis ka med pa de dag ni de bzhin gshegs pa'i rigs can yin no⁶⁾ zhes 'byung⁷⁾ ste /

(c) 'bras bu rnam par gzhas⁸⁾ pa yang de nyid kyis bstan to //

¹⁾ add. // P, ²⁾ bsgrims P, ³⁾ add. la P, ⁴⁾ rtog D, ⁵⁾ bzhag P, ⁶⁾ add. // P, ⁷⁾ add. ba D, ⁸⁾ bzhag P.

[和訳] 第 2 の立場の論者たちが〔第 1 の立場の論者に〕言う。論書（「撰決択分」）は別様には導かれ得ない。

(a)「もし、その麁重の習気によって、すべてのものの種子（一切種子）が包摂されるのであれば、出世間の諸法は何を種子として生じるのか。それ

ら〔出世間の諸法〕の原因が僂重を種子とするのは道理でない²⁶〕と〔第1の立場によって〕隠されて示されている、と言う。

(b) 種姓の設定もまた同じそ〔の論書〕の中で示される。「ある者たちの相続の中に、真如という所縁に通達しない永続的な障害の種子がある彼らは、相続の中に般涅槃できない種姓をもち²⁷、一方、煩惱障の種子がなく、永続的な所知障の種子がある彼らは、或る者は声聞種姓をもつ者であり、或る者は独覚種姓をもつ者であると設定される²⁸。ある者たち〔の相続〕の中に、その両者がいない彼らは、如来種姓をもつ者である²⁹」とある。

(c) 結果の設定もまた、同じそれによって示される。

第2の立場は、「撰決択分」の教説を支持し、第1の立場のように「撰決択分」の教説は理解され得ないと主張し、真如所縁縁種子の教説を引いて、第1の立場の主張をひとつずつ否定する。(a) では、第1の立場が「撰決択分」の文言を隠していると批判し、第2の立場が引用した「撰決択分」の直前の質問を引く。一切種子は僂重の習気に包摂されるから、第1の立場が会通したように、種子と習気とを区別して、一切種子から積集された習気という種子を切り離せないということである。(b) では、種姓の区別の設定を「撰決択分」に説かれる障害の種子の有無に基づいて示し、無漏種子を導入する必要性を否定する。(c) も同様に、結果の設定に関して (b) で引用した「撰決択分」の文言の通りであり、無漏種子を否定するものである。

以上が『瑜伽解説』にみられる般涅槃や菩提の獲得に関する2つの立場である。第1の立場は、『意地』の教説の論旨に合致する。この立場が「本地分」以来の種姓の立場を支持するものであり、「撰決択分」の真如所縁縁種子の教説について、アーラヤ識に存する無漏種子という概念を導入することで会通する。第2の立場は、

²⁶ ViS (Tib.) D zhi 27b3-4, P zi 30a7-8, (Ch.) 玄奘訳 T 589a13-16, 真諦訳 T 1025c13-15: gal te bag chags des sa bon thams cad bsdu la / de yang kun tu 'gro ba'i gnas ngan len zhes bya bar gyur na / de ltar na 'jig rten las 'das pa'i chos mams skye ba'i sa bon gang yin / de dag skye ba'i sa bon gyi dngos po gnas ngan len gyi rang bzhin can yin par ni mi rung ngo zhes na /

²⁷ チベット訳から te 'parinirvāna-gotra-santānāh とサンスクリットを想定して和訳した。

ViS (Tib.) D zhi 27b6-7, P zi 30b3-4, (Ch.) 玄奘訳 T 589a22-23, 真諦訳 T 1025c19-20: gang dag la de bzhin nyid la dmigs pa'i rkyen rtogs par bya ba la gtan du sgrub pa'i sa bon yod pa de dag ni yongs su mya ngan las mi 'da' ba'i chos can gyi rigs dang ldan par rnam par gzhas la /

²⁸ ViS (Tib.) D zhi 27b7-28a1, P zi 30b5-6, (Ch.) 玄奘訳 T 589a24-27, 真諦訳 T 1025c21-22: gang dag la shes bya'i sgrub pa'i sa bon gtan du ba lus la zhen pa yod la / nyon mongs pa'i sgrub pa'i sa bon ni med pa de dag las kha cig ni nyan thos kyi rigs can yin la / kha cig ni rang sangs rgyas kyi rigs can yin par rnam par gzhas go //

²⁹ ViS (Tib.) D zhi 28a1-2, P zi 30b6, (Ch.) 玄奘訳 T 589a27-28, 真諦訳 T 1025c22-23: gang dag de lta ma yin pa de dag ni de bzhin gshegs pa'i rigs can yin par rnam par gzhas ste /

「撰決択分」の教説を支持する真如所縁縁種子の立場である。アーラヤ識には出世間法の種子がないと主張し、従来の種姓の区別の設定を障害の種子の有無によって会通することで、第1の立場が主張する無漏種子を否定する。しかし、この立場は、第1の立場を批判することに終始しているため、『意地』所説の種子が完全に備わっていること (paripūrṇa-bīja) という語に対する解説として不十分であると言えよう。『瑜伽解説』における般涅槃や菩提の獲得に関する2つの立場とは、「本地分」の『意地』と「撰決択分」とのどちらの教説を重視するかという見解の相違である。その際、アーラヤ識に存する出世間法の種子や無漏種子を認めるか否かが議論の争点となっている。後代の瑜伽行派の者たちは『瑜伽論』の教説に不統一や矛盾があることを自覚しながらも、自身が重視する教説によって、その立場が分かれていたのであろう。

3.2. 教証・理証に拠る2つの立場

paripūrṇabīja をめぐる議論は、先に挙げた2つの立場以外の者たちについても続けて言及する。彼らは「本地分」の『意地』と「撰決択分」という『瑜伽論』にみられる異なる教説について、教証・理証を用いて解釈する。それが教証・理証に拠る2つの立場である。

2. 教証・理証に拠る2つの立場

2.1. 第3の立場

gzhan dag gis smras pa / (P113b1) gal te byang chub kyi sa bon med pa kho na yin na /¹⁾ (D93a6) rnam pa gsum po gang med pas byang chub rnam pa²⁾ gsum gyi sa bon gang med cing yongs su mya ngan las mi 'da' ba'i chos can yin zhe na³⁾ / byang chub sems dpa'i sa (P113b2) las ni dbang po rnon po la sogs pa ni rgyu yin te nus pa dang rigs yin par 'dod do // dad pa la sogs pa'i sa bon mjug thogs (D93a7) kho nar gnas ngan len zhes bya ba yang med do⁴⁾ zhes kyang 'og nas 'byung ba'i (P113b3) phyir ro //

lung ni gcig tu ma nges la rigs pa ni yod de /

[理証 (1)] zag pa med pa'i sems dang sems las byung ba rnams ni rnam par smin pa'i rnam par shes pa la gnas pa'i sa bon las byung ba yin te / 'byung ba dang (P113b4) ldan pa'i (D93b1) phyir ro // zag pa dang bcas pa'i sems dang sems las byung

ba thams cad bzhin te / chos mi mthun pa ni nam mkha'o //

[理証 (2)] de ^(Zh253) bzhin nyid la dmigs pa ni 'jig rten las 'das pa'i sa bon yin te / lam ^(P113b5) yin pa'i phyir ro // 'jig rten pa'i lam bzhin te / chos mi mthun pa ni nam mkha'o //

^(D93b2) ji ltar bkod pa'i bstan bcos ni drang bar mi nus te / shin tu gsal bar rgya cher rnam par phye ba'i phyir ro // de'i phyir gnyis⁵⁾ ^(P113b6) ka yang rnam par gzha⁶⁾ tu rung ste / de bzhin nyid dang bden pa bzhi mngon par rtogs pa rnam par gzha⁷⁾ pa bzhin no // 'gal ba yang med do // rnam par shes pa'i ^(D93b3) tshogs lnga dang ldan pa'i mjug tu gtan ^(P113b7) tshigs smras zin pa'i phyir ro //

¹⁾ no // D, ²⁾ om. pa P, ³⁾ zhes bya P, ⁴⁾ add. // P, ⁵⁾ gnyi P, ⁶⁾ bzhag P.

[和訳] 他の者たちが言う。もし、菩提種子が全くないならば、3種〔の菩提種子〕が全くないので、3種の菩提種子が全くなく、般涅槃できない性質をもつ者であるというならば、〔そうではない。〕『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi) の中では、鋭敏な根などは原因 (*hetu) であって、能力 (*pratibala) と種姓 (gotra) とであると認める³⁰⁾。「また、信などの種子

³⁰⁾ 管見した限り『菩薩地』において、根 (indriya) が原因 (*hetu) や能力 (*pratibala)、種姓 (gotra) であると直接言及はしない。しかしながら、『菩薩地』の以下の教説が関係すると思われる。まず種姓について、「種姓品」では菩薩種姓を備えた菩薩の卓越性を4つの様相から解説し、その中の根に関する卓越性が種姓と関連する。

BBh (Skt.) BBh_w 3.23-4.2, BBh_D 2.18-19, (Tib.) D 3a3, P 3b3-4, (Ch.) T 478c29-a2: tatrāyam indriya-kṛto viśeṣaḥ / prakṛtyaiva bodhisattvas tīkṣṇendriyo bhavati ¹⁾ / pratyekabuddho madhyendriyaḥ śrāvako mṛdv-indriyaḥ /

¹⁾ om. / BBh_w.

[和訳] その〔4つの様相の〕中で、根に関する卓越性は以下である。実に本来的に菩薩は鋭敏な根をもつ者である。独覚は中位の根をもつ者であり、声聞は鈍重な根をもつ者である。

菩薩種姓をもつ菩薩は鋭敏な根であるということから、『瑜伽解説』は鋭敏な根などが種姓であると理解しているのであろう。次に原因については、同じく「種姓品」の種姓の同義語を列挙するなかにみられる。

BBh (Skt.) BBh_w 2.25, BBh_D 2.2-3, BBh_R 406.14-17, (Tib.) D 2b2-3, P 3a1-2, (Ch.) T 478c8-11: upastambho hetur niśraya upaniṣat pūrvam-gamo nilaya ity apy¹⁾ ucyate / yathā gotram evam prathama-cittōtpādaḥ²⁾ sarvā ca bodhisattva-caryā /

¹⁾ om. api BBh_w, ²⁾ prathamaś cittōtpādaḥ BBh_{Dw}.

[和訳] 〔種姓は〕支え (upastambha)、原因 (hetu)、拠り所 (niśraya)、階級的原因 (upaniṣad)¹⁾、前提 (pūrvam-gama)、住み処 (nilaya) とも言われる。種姓〔の同義語〕のように、同様に初発心とすべての菩薩行と〔の同義語〕が〔知られるべきである〕。

¹⁾ 訳語は『菩薩地解説』(Bodhisattvabhūmivyākhyā, D (4047), P [112] (5548)) の「〔結果を〕順番に生じさせるので、階級的原因 (upaniṣad) である。」((Tib.) D yi 5a5, P ri 6a3: ^(D5a5, P6a3) rim gyis 'byung bar byed pas na_(om. na P) nyer_(nye bar P) gnas so //) という理解に拠った。

根が種姓であることから、種姓の同義語である原因を、根の同義語とするのであろう。最後に能力について、種姓との関連で以下のような教説が「種姓品」にある。

には実に直ちに麁重と称するものがない³¹」ともまた『意地』の当該教説の] 後にあるから。

[上述の] 教証はひとつに確定しなくとも理証がある。

[理証 (1)] 諸々の無漏の心・心所は、異熟識に立脚した種子から生起するものである。生起を備えるから。例えば、すべての有漏の心・心所のように。相違する法は虚空である。

[理証 (2)] 真如を所縁とするもの (tathatāmbana) は出世間の種子である。道 (mārga) であるから³²。例えば、世間道のように。相違する法は虚空である。

著作された通りに論書 (『瑜伽師地論』) は導かれ得ない。[論書は] 極めて明瞭で広大に開示されるから。それ故、両者 [理証 (1) (2)] とも設定として適当である。真如と四諦との現観を設定するように。違背もまたない。『五識身相応 [地]』の最後に理由が言われているからである³³。

BBh (Skt.) BBh_w 1.18-21 (Tib.), BBh_D 1.10-12, BBh_R 405.17-19, (Tib.) D 1a5-2a1, P 2a6-b1, (Ch.) T 478b20-22:

iha bodhisattvo gotraṃ niśritya (pratiṣṭhāya bhavyo¹⁾ bhavati²⁾ pratibalo 'nuttarāṃ samyak-sambodhim abhisamboddhum /

¹⁾ *pratiṣṭhāpayitavyo* BBh_D, ²⁾ *add.* / BBh_D.

[和訳] ここで、菩薩は種姓に依拠して、立脚して、[菩提への] 資質 (bhavya) をもつ者であって、無上正等菩提をさとする能力がある者 (pratibala) である。

種姓に立脚した菩薩は菩提への資質や能力ある者と言われる。すなわち、種姓が能力と言えよう。以上のように、『菩薩地』において、根が原因や能力や種姓であると直接言及する箇所はないものの、そのような理解を可能にする教説がみられる。

³¹ MBh (Skt.) YBh 26.14-15, (Tib.) D 13b4-5, P 14b7-15a1, (Ch.) T 284c6-7:

yāni punaḥ śraddhādi-kuśaka-dharma-pakṣyāṇi bījāni teṣu naivānuśaya-samjñā dauṣṭhulya-samjñā /

[和訳] また、信などの善法の側の種子、それらに対して、随眠と称するもの、麁重と称するものが全くない。

³² 真如を所縁とするもの (tathatāmbana) が道 (mārga) であるということについて、「撰決択分」の『五識身相応地意地』に真如を所縁とする道や「撰決択分」の『有余依無余依地』に真如を所縁とする道の修習という表現がみられ、それによって転依すると言われる。本小論の註 24 参照。松本 [2004: 141.17-144.12] は、道の修習が真如を所縁とするものであり、転依の原因であると理解する一方、転依の原因としての修習の重要性の観点から、真如を所縁とする道を転依の原因とすることに疑問を呈する。

³³ PBh (Skt.) YBh 10.9-12, (Tib.) D 5a7-b2, P 6a5-7, (Ch.) T 280a28-b2:

tatra deśāntara-prasthitasyēva yānavad¹⁾ āśrayo draṣṭavyaḥ pañcānāṃ vijñāna-kāyānāṃ / saḥāyārthikavat²⁾ saḥāyāḥ / karaṇīyavad ālambanaṃ / svaśaktivat tat-karma / aparāḥ paryāyāḥ / grha-sthasya grhavad eṣāṃ āśrayo draṣṭavyaḥ / bhogavad ālambanaṃ / dāsī-dāsādivat saḥāyāḥ / vyavasāyavat karma //

¹⁾ *em.*; *yānam* YBh, Cf. (Tib.) D 5a7, P 6a5: *bzhon pa bzhin du*, (Ch.) T 280a28: 如往餘方者所乘 ²⁾ *sic.*; Cf. (Tib.) D 5b1, P 6a5: *'gron_(mgroṇ p) po 'groggs pa lta bu'o*, (Ch.) T 280a29: 助伴如同侶。

[和訳] さて、あたかも他国へ旅立つ者にとつての乗り物のように、五識身の拠り所は見做されるべきである。諸々の同伴は同行者¹⁾のように、所縁は為すべきことによ

第3の立場は、まず教証によって、どちらの教説が適当であるか検討し、『意地』の教説に対して、『菩薩地』において、根は種姓などと認められるから、菩提種子が3種ともないような、般涅槃できない性質をもつ者の存在を否定することで、『意地』の教説を退ける。しかし、『意地』の教説に続く文言を引用して、善法の種子に麁重と称するものがないことを指摘し、習気によって一切種子が包摂され、遍在する麁重と言われる「撰決択分」の教説も同様に退ける。以上のような教証によって、『意地』と「撰決択分」とのどちらの教説が適当であるか確定しないので、この立場は論証式を使って2つの理証を挙げる。[理証(1)]は『意地』の教説に拠り、[理証(2)]は「撰決択分」の教説に拠る。しかしながら、著作された通りに『瑜伽論』は導かれ得ず、2つの理証は設定として適当であるため、理証によってもどちらの教説が適当であるか確定しない。この立場は、『瑜伽論』の異なる教説を教証・理証の点からどちらも適当であるとし、ひとつに確定しないのである。

2.2. 第4の立場

kha cig gis smras pa / gal te gnyis ka rnam par gzhas¹⁾ na de gnyis las gcig ni drang ba yin la gcig ni gtso bo yin par 'gyur te / dper na bstan pa 'di nyid la (P113b8) bden pa bzhi dag rab tu rgya cher rnam par gzhas²⁾ pa las (D93b4) brtsams te rnam par gzhas³⁾ kyang de bzhin nyid rnam par gzhas⁴⁾ pa ni bden pa'o⁵⁾ zhes gsungs pas na / de ni gtso bo yin pa de bzhin du 'di la yang (P114a1) gang gtso bo yin par gang nas gsungs te / lung dang rigs pa dag gi skabs kyang yod pas 'di la ni nges par 'byung ba'i thabs med do // (D93b5) ha cang thal bar 'gyur ba'i brjod pa 'di ni rnam par (P114a2) gtan la dbab pa bsdu ba las nges par bya ba'o //

1) 2) 3) 4) *bzhag* P, 5) add. // P.

[和訳] 或る者は言う。もし、両者 [理証(1)(2)] を設定すれば、その2つのうち、ひとつは導かれる必要のあるもの (*neya) であり、ひとつは導

うに、その機能は自身の潜勢力のように [見做されるべきである]。

別の観点がある。これらの [五識身の] 拠り所は、家に住む者にとっての家のように見做されるべきである。所縁は享受物のように、諸々の同伴は侍女・侍者などのように、機能は仕事のように [見做されるべきである]。

¹⁾ チベット訳および漢訳に拠って訳した。

「本地分」の第1地『五識身相応地』(*Pañcaviññānakāyasamprayuktā bhūmi*) の最後は、5つの認識をそれぞれ解説する際の拠り所 (*āśraya*)、所縁 (*ālambana*)、同伴 (*sahāya*)、機能 (*karman*) という4つの区分に関して、譬喩を用いて説く。この中に所縁に関する2つの解釈が示される。『瑜伽解説』は、複数の解釈を『瑜伽論』自身も併記することを指しているようである。

くもの (*nāyaka) である。例えば、同じこの説示 (『瑜伽師地論』) の中で、四諦を詳細に設定することから始まって、設定するけれども、「真如の設定は〔四〕諦である³⁴」と仰ったので、それ (真如) は導くものであり、同様に、これ [理証 (1)] についても、あるもの [理証 (2)] は導くものであると、あるものの中で仰って³⁵、教証と理証との根拠もあるので、これ (paripūrṇa-bīja) について、出離の方便はない。過剰適用されるこの表現 (paripūrṇa-bīja) は、「撰決択分」の中で確定されるべきである。

第4の立場は、第3の立場で設定された2つの理証を受けて、それらを導かれる必要のあるもの (*neya) と導くもの (*nāyaka) とに二分する。そして、四諦と真如とについて、教証によって真如が導くものであるという例を挙げる。この例と同様に、2つの理証についても、[理証 (2)] が導くものであるから、種子が完全に備わっていること (paripūrṇa-bīja) には出世間法が生じるという出離の方便はないと述べ、種子が完全に備わっていることという表現は、「撰決択分」で確定すべきと主張する。この立場は、適当と認められる2つの理証を、導かれる必要のあるものと導くものとの教証によって二分し、『瑜伽論』にみられる異なる教説のどちらを重視すべきか決定する。

以上が『瑜伽解説』にみられる教証・理証に拠る2つの立場である。第3の立場は、教証だけで『意地』と「撰決択分」とのどちらの教説が適当であるか確定しな

³⁴ 「撰決択分」の『解深密経』(Samdhinirmocanasūtra) が引用される『菩薩地』(菩薩功德品 (Bodhisattvagūṇa-pāṭala) では、如所有性 (yathāvad-bhāvikatā) を解説するなかで7種の真如を列挙し、その中で、4種の真如が四諦であると言われる。

ViS (Tib.) D zi 71b4-5, P 'i 78b4-5, (Ch.) T 725b21-24:

gnas pa'i de bzhin nyid ni ngas sdug bsgal gyi bden pa bstan pa gang yin pa'o // log par
bsgrub pa'i de bzhin nyid ni ngas kun 'byung ba'i bden (P78b5) pa bstan pa gang yin pa'o // rnam
par dag pa'i de bzhin nyid ni ngas 'gog pa'i bden pa bstan pa gang yin pa'o // yañ (D71b5) dag par
bsgrub¹⁾ pa'i de bzhin nyid ni ngas lam gyi bden pa bstan pa gang yin pa'o //

¹⁾ sgrub P.
[和訳] 安立真如は私が説示した苦諦である。邪行真如は私が説示した集諦である。
清浄真如は私が説示した滅諦である。正行真如は私が説示した道諦である。

³⁵ この文言だけならば、2つの理証のどちらが導くものであるか明確でない。教証についても「あるもの」と述べるだけで、具体的には明かされていない。手がかりとして、第4の立場は「撰決択分」の教説、すなわち [理証 (2)] が導くものであると主張するので、例に引かれる「真如の設定は〔四〕諦である」という教証と同等の教証を2つの理証の術語から探せばよい。例えば、無漏と真如という語を取り出すと、「撰決択分」の『菩薩地』(真実義品 (Tattvārtha-pāṭala) に、真如は無漏であるという趣旨の文言がある。

ViS (Tib.) D zi 5b6, P 'i 6a4-5, (Ch.) T 698a3-4:

de bzhin nyid ni zag pa med (P6a5) pa'i dmigs pa'i don gyis zag pa med pa yin gyi / zag pa zad
pa'i mtshan nyid kyi don gyis ni ma yin no //

[和訳] 真如は無漏の所縁の意味という点で無漏であるけれども、漏尽の特相という意味の点では〔無漏で〕ない。

いので、理証の点から確定しようとするが、どちらの理証も設定として適当であるため、どちらの教説も適当であるとし、ひとつに確定しない。第4の立場は、第3の立場で設定された理証を認めた上で、それらを導かれる必要のあるものと導くものとの教証を通じて二分し、「撰決択分」の教説を導くものとする。これらの立場は、教証・理証によって『瑜伽論』の異なる教説を解釈していると言えよう。

4. おわりに

以上の考察から明らかになった点をまとめると、以下の4点が『瑜伽論』および『瑜伽解説』における般涅槃や菩提の獲得に関する見解に関連して指摘できる。

(1) 『瑜伽師地論』における般涅槃や菩提の獲得に関する見解

『瑜伽論』において、般涅槃や菩提の獲得に関する見解には以下の2つの立場がある。

種姓の立場は、「本地分」以来の基本的な立場である。出世間法は一切種子識に含まれる菩提種子や種姓から生じ、般涅槃の可能性の有無や菩提の区別は菩提種子や種姓の区別の点から論じられる。

真如所縁縁種子の立場は、「撰決択分」に新しくみられる立場である。出世間法は真如所縁縁種子から生じ、般涅槃の可能性の有無や菩提の区別は障害の種子の有無の点から論じられ、種姓の区別は仮設とされる³⁶。

(2) 『瑜伽師地解説』における般涅槃や菩提の獲得に関する見解

(1) で指摘した般涅槃や菩提の獲得に関する2つの立場は、『瑜伽解説』所説の *paripūrṇabīja* をめぐる議論のなかで後代の瑜伽行派の者たちの第1と第2の立場として見い出される。

第1の立場は、「本地分」以来の種姓の立場を支持するものである。一切種子識に有漏と無漏との諸法の潜勢力を認め、『意地』の教説の論旨に合致し、「撰決択分」の真如所縁縁種子の教説に対して、アーラヤ識に存する無漏種子という概念を導入することで会通し、種姓の区別があると主張する。

第2の立場は、「撰決択分」の教説を支持する真如所縁縁種子の立場である。アーラヤ識に出世間法の種子はないと主張し、従来の種姓の区別の設定を障害の種子

³⁶ 【2.1. 種姓の立場】【2.2. 真如所縁縁種子の立場】参照。

の有無によって会通して、第1の立場の主張する無漏種子を否定する³⁷。

(3) 『瑜伽師地解説』の議論の争点

『瑜伽解説』では、アーラヤ識に存する出世間法の種子や無漏種子を認めるか否かが議論の争点となっている。これを認める場合は、本小論が取り上げた『意地』の教説をはじめとする種姓の立場となり、認めない場合は、真如所縁縁種子の立場となる。このようにアーラヤ識に存する出世間法の種子や無漏種子を認めるか否かを指標として、般涅槃や菩提の獲得に関する見解が大きく2つの立場に分かれることが確認される。

(4) 『瑜伽師地論』における異なる教説の解釈方法

『瑜伽解説』所説の *paripūrṇabīja* をめぐる議論を通して、後代の瑜伽行派の者たちは『瑜伽論』の教説に不統一や矛盾があることを自覚しながら、『瑜伽論』の異なる教説を様々な方法で解釈していたことがわかる。その解釈方法は以下のとおりである。

(2) で指摘した『瑜伽解説』における2つの立場は、「本地分」の『意地』と「撰決択分」とのどちらの教説を重視するかという見解の相違である。『瑜伽論』の異なる教説に対して、どちらの教説を重視するかで、互いの説を会通し否定するのである。これは『瑜伽論』の異なる教説を、自身が重視する教説によって解釈する方法と言える。

さらに『瑜伽解説』において、教証・理証に拠って解釈する第3と第4の立場があり、どちらの立場も教証・理証を用いて解釈する点は共通する。第3の立場は、教証だけでどちらの教説が適当であるか確定しないので、2つの理証を立てるが、両方の理証とも適当である場合は、『瑜伽論』の異なる教説をひとつに確定しない。これは教証も理証も適当である場合、『瑜伽論』の異なる教説の最終的な確定をしない解釈方法と言える。第4の立場は、『瑜伽論』の異なる教説に対して理証を設定し、それらを導かれる必要のあるものと導くものにとり教証を通じて二分し、導くものを重視すべき教説として確定する。これは『瑜伽論』の異なる教説の理証に対して、導かれる必要のあるものと導くものという枠組みを設け、その振り分けを教証に委ねた解釈方法と言える³⁸。

³⁷ 【3.1. 般涅槃や菩提の獲得に関する2つの立場】参照。

³⁸ 【3.1. 般涅槃や菩提の獲得に関する2つの立場】【3.2. 教証と理証に拠る2つの立場】参照。

《略号一覧および一次文献》

- BBh *Bodhisattvabhūmi*, (Tib.) D (4037) wi 1b1-213a7, P [110] (5538) zhi 1a1-247a8, (Ch.) T [30] (1579) 478b7-577c16.
- BBh_D *Bodhisattvabhūmi*, (Skt. ed.) Dutt [1966].
- BBh_R *Bodhisattvabhūmi*, (Skt. ed.) Roth [1977].
- BBh_W *Bodhisattvabhūmi*, (Skt. ed.) Wogihara [1971].
- Ch Chinese translation.
- D チベット大蔵経 デルゲ (sDe dge) 版. 番号は『西藏大蔵経総目録』(東北大学帝国大学法文学部編、1934) に拠った。
- MBh *Manobhūmi*, (Skt. ed.) Bhattacharya [1957: 11-72], (Tib.) D (4035) tshi 5b2-37a7, P [109] (5536) dzi 6a7-42b2, (Ch.) T [30] (1579) 280b3-294b5.
- P チベット大蔵経 北京 (Peking) 版. 番号は『西藏大蔵経 総目録・索引』(鈴木学術財団、1962) に拠った。
- PBh *Pañcaviññānakāyasamprayuktā bhūmi*, (Skt. ed.) Bhattacharya [1957: 3-10], (Tib.) D (4035) tshi 1b1-5b2, P [109] (5536) dzi 1a1-6a7, (Ch.) T [30] (1579) 279a1-280b2.
- Skt Sanskrit.
- *Skt Sanskrit reconstruction.
- ŚrBh₁ *Śrāvabhūmi*, (Skt. ed.) 声聞地研究会 [1998].
- ŚrBh₂ *Śrāvabhūmi*, (Skt. ed.) 声聞地研究会 [2007].
- T 大正新脩大蔵経.
- Tib Tibetan translation.
- ViS *Viniścayasamgrahaṇī*, (Tib.) D (4038) zhi 1b1-zi 127a4, P [110-111] (5539) zi 1a1-'i 142b7, (Ch.) 玄奘訳『瑜伽師地論』: T [30] (1579) 579a4-749c18, 真谛訳『決定蔵論』: T [30] (1584) 1018b22-1035b25.
- YBhVy *Yogācārabhūmivyākhyā (rNal 'byor spyod pa'i sa rnam par bshad pa)*, D (4043) 'i 69a1-140b7, P [111] (5544) yi 82a6-176a3.
- Zh *Zhonghua Canon* (中華大蔵経), bsTan-'gyur, Sems Tsam, vol. 75, 中国蔵学研究中心《大蔵経》対勘局, 中国蔵学出版社, 北京, 2001.
- 瑜伽解説 瑜伽師地解説 (*Yogācārabhūmivyākhyā*).
- 瑜伽論 瑜伽師地論 (*Yogācārabhūmi*).

《参考文献》

Bhattacharya, Vidhushekhara

[1957] *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga, The Sanskrit Text Compared with the Tibetan Version*, The University of Calcutta, Calcutta.

Dutt, Nalinaksha

[1966] *Bodhisattvabhūmi, [Being the XVth Section of Asaṅgapada's Yogācārabhūmi]*, Tibetan Sanskrit Works Series vol. 7, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna.

富貴原章信

[1988] 『中国日本仏性思想史』富貴原章信仏教学選集 1、国書刊行会、東京。

袴谷憲昭

[1979] 「Vinīścayasamgrahaṇīにおけるアーラヤ識の規定」、『東洋文化研究所紀要』79、pp. 1-79; repr. 『唯識思想論考』、大蔵出版、東京、pp. 362-445。

久下陞

[1972] 『守護国界章』と『一乗仏性権実論』とにおける真如所縁縁種子の問題」、『印度学仏教学研究』21-1、pp. 279-282。

[1975] 『守護国界章』における唐沙門法宝の仏性論 —真如所縁縁種子をめぐる論争—、『仏教大学研究紀要』59、pp. 15-38; repr. 『徳一論叢』、国書刊行会、東京、1986、pp. 446-462。

[1985] 『一乗仏性権実論の研究』上、隆文館、東京。

[1988] 「中日両国に互る仏性論の展開 —真如所縁縁種子論争をめぐる—」、『仏教大学仏教文化研究所年報』6、pp. 53-76。

松本史朗

[2004] 「瑜伽行派と dhātu-vāda」、『仏教思想論』上、法蔵館、東京、pp. 55-218。

袁輪顕量

[1991] 「真如所縁縁種子と法爾無漏種子」、『仏教学』30、仏教思想学会、pp. 47-69。

西芳純

[1987] 「唯識説における無漏種子論攷 —慈恩の解釈を中心として—」、『仏教学研究』43、龍谷大学仏教学会、pp. 189-210。

Roth, Gustav

[1977] “Observation on the First Chapter of Asaṅga's Bodhisattvabhūmi”, *Indologica Taurinensia* 3/4, pp. 403-412; repr. *Indian Studies (Selected Papers) by Gustav Roth*, Bibliotheca Indo Buddhica 32, Sri Satguru, Delhi, 1986, pp. 165-174.

Sakuma, Hidenori

[1990] *Die Āśrayaparivṛtti-theorie in der Yogācārabhūmi*, Alt- und Neu-Indische Studien 40, 2vols., Franz Steiner Verlag, Stuttgart.

Schmithausen, Lambert

[1969] *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Vinīścayasamgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, 264. Band., 2. Abhandlung, Hermann Böhlau, Wien.

[1987] *Ālayavijñāna, On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy*, 2vols., Studia Philologica Buddhica, Monograph Series 4, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo; repr. The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo, 2007.

声聞地研究会

[1998] 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処 —サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合仏教研究所研究叢書第4巻、山喜房佛書林、東京。

[2007] 『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処 付非三摩呬多地・聞所成地・思所成地 —サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合仏教研究所研究叢書第18巻、山喜房佛書林、東京。

末本文美士

[1995] 『平安初期仏教思想の研究』、春秋社、東京。

田村晃祐

[1992] 『最澄教学の研究』、春秋社、東京。

常盤大定

[1973] 『仏性の研究』、国書刊行会、東京。

Wogihara, Unrai

[1930/36] *Bodhisattvabhūmi, A Statement of Whole Course of the Bodhisattva, (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, 2vols., 大正大学聖語学研究室, Tokyo; repr. 『梵文菩薩地経』、山喜房佛書林、東京、1971。

山部能宜

- [1987] 「初期瑜伽行派に於ける界の思想について —*Akṣarāśisūtra* をめぐって—」、『待兼山論叢 哲学篇』21、pp. 21-36。
- [1989] 「種子の本有と新熏の問題について」、『日本仏教学会年報』54、pp. 43-58。
- [1990] 「真如所縁縁種子について」、『北畠典生教授還暦記念 日本の佛教と文化』、永田文昌堂、京都、pp. 63-87。
- [1991] 「種子の本有と新熏の問題について (II)」、『仏教学研究』47、龍谷仏教学会、pp. 93-112。

吉村誠

- [2006] 「唯識学派における種子説の解釈について —真如所縁縁種子から無漏種子へ—」、『印度学仏教学研究』55-1、pp. 86-91。
- [2009] 「唐初期の唯識学派と仏性論争」、『駒沢大学仏教学部研究紀要』67、296-310。
- [2011] 「唯識学派の種子説 —真如所縁縁種子から無漏種子へ—」、『駒沢大学仏教学部研究紀要』69、pp. 99-119。
- [2012] 「中国唯識思想史の展開」、『唯識と瑜伽行』シリーズ大乘仏教 7、春秋社、東京、pp. 255-290。

(本研究は平成 24 年度科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である)

京都大学大学院博士課程 (仏教学)

日本学術振興会特別研究員 DC

高野山大学密教文化研究所受託研究員

Graduate Student, Kyoto University

JSPS Research Fellow

Entrusted Researcher of the Institute of Esoteric Buddhist Culture, Koyasan University